

外来・デイケア *Outpatient department*

「病が重いときだけ短期間入院し、ケアを受けて軽減したら地域へ帰る、そして必要が生じたらまた入院する」—— これからの精神科病院はそういう場所になっていかなければならない。そのためには、病院が「来院しやすい」「入退院を繰り返してもよいと思える」「地域の一部だと感じられる」空間である必要がある。この連載では、そのように感じ取ってもらえる空間のつくり方を、建築家の立場から解説いただく——「精神科病院こそ、今変わることができる建築である」。

鈴木慶治 Suzuki Keiji
共同建築設計事務所・建築家

治療の第一印象を決める、玄関としての外来

この連載では、「地域に帰るため」をテーマに病院建築のあり方を私なりに書かせていただいていたが、つまるところ患者さんが地域に帰ることができる土壌が整っていないと患者さんを地域に返すことはできない。家族が患者さんを見守ることができ、地域住民に理解があってこそ、患者さんは安心して地域に帰ることができる。

これからの精神医療は、早期治療により、長期間現在の生活の場を離れることは少なくなるという構図があるとすると、それをふまえた病院のあり方を考えることができる。具体的には「外来診療部門」を充実し、「デイケア」で生き甲斐探しの手助けをすることになるのかと思う。

この連載の第1回目は「保護室」がテーマだった。患者さんや家族が最初に精神科病院に出会う場合は、救急の場面であることが少なくない。そのため保護室は精神科病院の代名詞のようにいわれるが、そこはあまりにも貧しい空間であった。昨今はさまざまな工夫によって保護室にも変化が起こっているので、それを実感し建築の力を皆さんに理解していただけたらという思いで第1回目のテーマに選んだ。

保護室が精神科病院の裏の顔とするならば、外来診療部門はまさに表の顔。その病院の理念が前面に表出しているところである。地域で暮らし続けてもらうためには何より早く病院の敷居をまたいでもらうことが大切なわけであるから、単に「格好のよい」「興味をそそる」ような玄関をつくるだけでも、その意味はあるのだと思う。

しかも、ここぞ短時間で人(患者さん)と人(医療者)が濃密に向き合い、治療に向けてのさまざまな試みが計画、